沖縄の伝統工芸展 in 沖縄

トークイベント

11月3日（木／文化の日）

●11:00〜12:00

沖縄らしいやちむんを求めて

北窯　松田共司工房親方　松田共司さん
壺屋陶器事業協同組合理事長　島袋常秀さん
ファシリテーター　那覇市立壺屋焼物博物館学芸員　比嘉立広さん

やちむんとは、沖縄の言葉で焼物（主に陶器）のこと。沖縄らしいやちむんを追求してきた２人の熟練職人を迎え、専門家（壺屋焼物博物館の学芸員）の進行でやちむんの魅力を語ります。

●13:00〜14:00

苧麻から生まれた糸が織りなす宮古上布

宮古上布保持団体代表　新里玲子さん
ファシリテーター（調整中）

宮古上布は、宮古島の苧麻で績（う）んだ糸を染めて織り上げる国の重要無形文化財。伝統を守りつつ、新しい色やデザインにも挑戦してきた新里さんに、宮古の織物の可能性などを聞きます。

●15:00〜16:00

沖縄の染織と着物スタイリング ～初めての沖縄の染織～

着物スタイリスト・きものlifeコンサルタント　コバヤシクミさん

東京藝術大学（油画）卒。着物雑誌や漫画監修など、様々なメディアで活動中。全国で講座も開催。沖縄染織の魅力や、“垢抜けコーディネート”の秘訣などお話しいただきます。

11月4日（金）

●11:00〜12:00

若手染織クロストーク 沖縄染織のこれから

琉球絣・南風原花織　宮城麻里江さん
琉球びんがた事業協同組合理事長　宮城守男さん
首里織　仲宗根綾さん
ファシリテーター　モモト編集長　いのうえちずさん

伝統を核とした新しい表現にも挑戦している、気鋭の若手職人が登壇。洋装やインテリアなど、沖縄の染め織りの魅力を広く発信する取り組みと可能性について話を聞きます。

●13:00〜14:00

伝統芸能と伝統工芸

琉球舞踊家／組踊立方　宮城茂雄さん
琉球びんがた　ひがしや　道家良典さん、道家由利子さん
ファシリテーター　モモト編集長　いのうえちずさん

舞い姿に凛とした美しさがある宮城茂雄さん。実は大の着物愛好家でもあります。宮城さんの踊り衣装を手がけた若手作家と共にコラボ作品をふりかえり、沖縄の染織の魅力に迫ります。

●15:00〜16:00

三線 絹の音色 ～琉球・沖縄 聴き比べ～

沖縄県三線製作事業協同組合事務局長　仲嶺幹さん
三線演奏　喜納吏一さん
ファシリテーター　モモト編集長　いのうえちずさん

沖縄文化を語るのに欠かせない三線。かつて、三線の絃は絹製でした。今回、昔の絹絃と現代のナイロン絃との聴き比べをしながら、三線の歴史をひもとき、その奥深い世界に迫ります。

沖縄の主な工芸

「工芸の島」とも言われる沖縄の、主な工芸品をご紹介します。

※出展工芸品は最新情報をご確認ください

喜如嘉の芭蕉布
Kijoka no Bashofu

国指定重要無形文化財　国指定伝統的工芸品　県指定伝統工芸製品

喜如嘉芭蕉布事業協同組合

風通しの良い芭蕉布は、蒸し暑い亜熱帯気候にぴったり。古くから琉球の人々が愛用していました。糸芭蕉の原皮からとれる糸を手で績み、絣糸を手くくりし、琉球藍、シャリンバイ等の植物染料で染め、織り上げます。

読谷山花織
Yuntanza-hanaui

国指定伝統的工芸品　県指定伝統工芸製品

読谷山花織事業協同組合

起源は15世紀頃にさかのぼるとされ、王府に納める御用布として、読谷以外の一般庶民は着用できませんでした。生糸、綿糸を素材に幾何学模様を色糸で浮かせ、絣や縞・格子をあしらった織物です。

読谷山ミンサー
Yuntanza-Minsa

国指定伝統的工芸品　県指定伝統工芸製品

読谷山花織事業協同組合

ミンサーとは木綿の細い帯を指す言葉。起源は15世紀にさかのぼると言われ、当時琉球が交易していた東南アジアの影響が色濃く出ています。経糸に竹串などを用いて浮文様を織り出す技法です。

知花花織
Chibana-hanaori

国指定伝統的工芸品　県指定伝統工芸製品

知花花織事業協同組合

沖縄市知花地区で祭事の衣装や晴れ着として織られていました。19世紀後半には現在の技術・技法は確立され、定着していたと考えられます。経方向に文様が浮く経浮花織が特長です。

琉球びんがた
Ryukyu Bingata

国指定伝統的工芸品　県指定伝統工芸製品

琉球びんがた事業協同組合

15世紀に始まった沖縄唯一の伝統的染物で、型染めと糊引き（筒描き）とに分かれます。綿布、絹布、芭蕉布等に顔料と植物性染料を手染めする色鮮やかな紅型と、琉球藍の浸染による藍型があり、華やかな魅力があります。

首里織
Shuri Ori

国指定伝統的工芸品　県指定伝統工芸製品

那覇伝統織物事業協同組合

王都として栄えた首里では、南方諸国や中国の影響を受け、絣、花織、道屯織、花倉織、ミンサー等、独特の織物が伝わり、それらを総称して首里織と呼びます。洗練されたデザインで、着物通の方に人気です。

琉球絣
Ryukyu Kasuri

国指定伝統的工芸品　県指定伝統工芸製品

琉球絣事業協同組合

1611年薩摩より木綿の種子と織技術の導入により始まりました。600種に及ぶ幾何学文様は生活や自然を図案化したものが多く、絹糸、綿糸、麻糸を使用して、素朴な味わいと端正な風格を有しています。

南風原花織
Haebaru Hanaori

国指定伝統的工芸品　県指定伝統工芸製品

琉球絣事業協同組合

南風原花織には四種類の技法があります。喜屋武八枚やタッチリーなどの両面浮花織、綽浮のクヮングヮン花織、雑取織のチップガサー、綾織の南風原斜文織で、南風原町本部地区に工房が集中しています。

久米島紬
Kumejima Tsumugi

国指定重要無形文化財　国指定伝統的工芸品　県指定伝統工芸製品

久米島紬事業協同組合

500年前に中国より養蚕の技術を導入し、織られた沖縄最古の紬織物です。鉄分の多い土を使った泥染めによる黒褐色や、草木染による黄色や赤茶色、灰色、鶯色などが基本色。きぬた打ちで風合いを整えます。

宮古上布
Miyako Jofu

国指定重要無形文化財　国指定伝統的工芸品　県指定伝統工芸製品

宮古織物事業協同組合

起源は16世紀後半、島に自生する苧麻を使って織り始めたと伝わります。手績みの糸は細く、藍染め、手織り等、昔ながらの手法で作られ、近代以降は精緻な絣模様が取り入れられました。

八重山上布
Yaeyama Jofu

国指定伝統的工芸品　県指定伝統工芸製品

石垣市織物事業協同組合
竹富町織物事業協同組合

起源は未詳ですが、記録には17世紀初めの薩摩への貢納布として初めて登場します。苧麻を原料として、染料は琉球藍、紅露などの植物染料。海さらしで漂白した白地に絣が浮かぶ夏物の白上布です。

八重山ミンサー
Yaeyama Minsa

国指定伝統的工芸品　県指定伝統工芸製品

竹富町織物事業協同組合
石垣市織物事業協同組合

綿糸をインド藍や福木、紅露（クール）等の植物染料で染めた絣織物です。たてうね織の一種で、五つ玉の絣と四つ玉の絣が交互に配されたデザインは「いつの世まで も末永く」という意味で有名。帯や袋物が多く生産されています。

与那国織
Yonaguni Ori

国指定伝統的工芸品　県指定伝統工芸製品

与那国町伝統織物協同組合

与那国の織物が登場する最古の記録は15世紀末。現在は与那国花織、与那国ドゥタティ（縞織物）与那国カガンヌブー（ミンサー）、与那国シダディ（紋織の手ぬぐい）があり、染料は島の植物染料を使います。

三線
Sanshin

国指定伝統的工芸品　県指定伝統工芸製品

沖縄県三線製作事業協同組合

沖縄の文化芸能に欠かせない楽器、三線。14世紀に中国から「三弦（サンスェン）」が伝わり、琉球独自の発展を遂げたと考えられています。棹には黒檀等の堅い木材を使用し、胴にはニシキヘビの皮等を張ります。

壺屋焼
Tsuboya yaki

国指定伝統的工芸品　県指定伝統工芸製品

壺屋陶器事業協同組合

1682年、知花窯、湧田窯、宝口窯の三つの窯が現在の壺屋に移設統合されたのが、壺屋焼の始まり。2種類に大別され、荒焼には無釉の大きな甕などが、上焼には釉薬を施し独特の絵付けをした器などが多く見られます。

琉球漆器
Ryukyu Shikki

国指定伝統的工芸品　県指定伝統工芸製品

14世紀末頃、中国から技法が伝わったと考えられています。木地はデイゴ、エゴノキ等で、上塗りには天然漆を使用。鮮やかな朱漆、渋い黒漆が生産され、加飾は沖縄独特の堆錦のほか、螺鈿、沈金、箔絵など技法も多彩です。

琉球ガラス
Ryukyu Glass

県指定伝統工芸製品

沖縄県琉球ガラス製造協同組合

明治時代に入ってランプのホヤや投薬瓶等を生産したのが始まりです。戦後は駐留米軍のお土産品から出発し、現在では、飲食器や花瓶等の日用品が手作りのガラス工芸として高く評価されています。

ウージ染め（サトウキビ染め）
Uji zome

豊見城市ウージ染め協同組合

平成元年度の「むらおこし事業」で開発された“豊見城市ウージ染め”は沖縄特産のサトウキビの葉や花穂を染料としています。葉は美しい黄緑色に、穂はピンク色に染まり、その自然な風合いと色が特徴です。

うらそえ織
Urasoe Ori

うらそえ織協同組合

浦添市で育てた桑を食べて育った蚕が作った繭から糸をひいて生糸を作り、染めから織りまでを、一人の織り手が一貫して行います。丁寧に手びきした糸には、繭糸がもっているウェーブがそのまま残っているのが特長。

金細工
Kinzaiku

琉球王朝時代、多くの職人が守礼門近くで工房を構え、職人たちは金細工（かんぜーく）と呼ばれていました。現在、ジーファー（かんざし）、房指輪などが作られています。

小木工
Small Woodwork

昭和50年代に興った産業で、挽物技術や指物技術等の木地加工技術の進歩と、塗装技術の革新により、木肌を活かした木工品が生活の中に用いられるようになりました。